

共生空間を生きる 自然・他者・過去をめぐって

第1セッション 環境科学部242教室 〈司会 葉柳和則〉

- 10:00 開会の辞 長崎大学環境科学部長 武政剛弘
10:05 趣旨説明 長崎大学環境科学部 葉柳和則
- 10:15 生存をつなぐ共生の三次元 – 自然・他者・過去 長崎大学環境科学部 増田 研
10:55 都市と自然、それをつなぐ里山 (二次的自然環境) 森林総合研究所 田中伸彦
11:35 長野県・八ヶ岳東南麓における「共生」 – 外国人研修生と「農」の問題 名古屋大学大学院環境学研究科 西原和久
12:15 討論 (13:00終了予定)

第2セッション 環境科学部141教室 〈司会 葉柳和則〉

- 14:00 首都圏郊外の都市における里山 – その実態と未来 日本学術振興会特別研究員・東京大学大学院新領域創成科学研究科 寺田徹
14:40 異文化の共生をはかる学校空間 – イタリアを事例として 神戸大学大学院国際協力研究科 杉野竜美
15:20 原爆の記憶と共に生きる – 長崎における生存者とのインタビュー実践から 日本学術振興会特別研究員・慶應義塾大学大学院社会学研究科 高山真
16:00 討論
16:50 閉会の辞 長崎大学環境科学部 佐久間正

2009年5月29日 (金)

「共生」シンポジウム実行委員会

葉柳和則・増田 研・保坂稔・渡邊貴史

問い合わせ! 葉柳 (hayanagi@nagasaki-u.ac.jp)

! ! 増田 (ken-m@nagasaki-u.ac.jp)

共生空間を生きる

自然・他者・過去をめぐって

本シンポジウムは、「環境」を生態環境 (ecological environment) の次元から解放し、共生空間 (convivial/co-existent space) の問題として捉えなおすことを目的とする。議論のために用意された操作的概念は「共生の三つの次元」、すなわち自然との共生、他者との共生、過去との共生である。

一般に「共生」は、生態学的な脈絡 (自然との共生) と、社会学的な脈絡 (異文化・外国人・障害者などとの共生) という、2つの脈絡で用いられてきた。本シンポジウムでは、こうした空間的なとらえ方に、時間的な要素すなわち「過去との共生」を加えて議論を行う。

「共生」とは、読んで字のごとく「共に生きること」である。だがこのように書いた瞬間から、「共生」について語ることは、ある種の枠の中に閉じこめられている。

その理由の一つは、「共生」について紡がれてきた言葉の多くが、環境問題における「自然との共生」に割かれてきたことにある。もちろん人間は空気・水・大地といった物質的生態環境とのあいだに共生的・互恵的な関係を築くことで生命をつないできた。したがって、自然との共生が注目されるのは当然であろう。

だがその一方で、この「共に生きる」という語感をもたらす平和的な味付けは、共生的関係のあり方に対する幻想を振りまいてもきた。そもそも生態学における「共生symbiosis」は、共存共栄をイメージさせる総理共生のみならず、一方のみが利益を得るタイプ、共倒れするタイプなど、多様な意味を含む概念である。

人間は「共生空間」の中でしか、己を見いだすことも、そして生存をつなぐこともできない。人間が「自然」「他者」「過去」との間に多様な関係の網の目を築きながら生存を定位する、その有り様を描くためのフレームワークを作ることで、「エコ」に容易に換言／還元されない見取り図を構想しようではないか。

(実行委員会)

第1セッション

司会：葉柳和則（長崎大学環境科学部）

10:15-10:55

生存をつなぐ共生の三次元 – 自然、他者、過去

増田 研（長崎大学環境科学部）

人間が生きる広義の「環境」は、し物質的な循環だけでは構成されない。本シンポジウムで確認（あるいは再確認）したいのは、環境問題が決して物質だけでは語り尽くせないということであり、そのために我々はその見取り図を「共生の三つの次元」として提案したいのである。

三つの次元とは即ち、自然との共生、他者との共生、そして過去との共生である。

生物としてのヒトはつねに空気や水、土地といった「自然」に依拠しつつ、「自然」との交換関係において生存をつないできた。この「自然との交換関係」が現在、その物質的側面において「循環」として概念化され、環境問題の主要トピックとなっていることは言うまでもない。

ところでレヴィ＝ストロースがその初期の研究で明らかにしたように、人間を人間たらしめるものは交換関係に常に身を置くことと、その過程における「他者」の定位である。同時に、個人の人格や、集団のアイデンティティを構成するものが「記憶」であるとすれば、我々は自然のみならず、他者や過去との共生によっても生存をつないでいることになる。

そうした理解の構図を検討するために、本発表では私が専門とするアフリカにおける紛争問題を取り上げて検討したい。

10:55-11:35 長野県・八ヶ岳東南麓における「共生」 – 外国人研修生と「農」の問題

西原和久（名古屋大学大学院環境学研究科）

日本における外国人研修生・技能実習生制度の一断面を、長野県の川上村を中心とする八ヶ岳東南麓を事例として、検討する。日本のいわゆる「研修生制度」はすでに各方面からいろいろ批判されてきている。しかし、単に批判するだけではなく、実情を踏まえ、かつ今後を見据えた形で、この問題を考えていくことはできないだろうか。

人口4,000人余りの村に、現在、700人を超える中国人、フィリピン人が半年あまりの「研修」に来ている。とはいえ、実情は「農作業」という「労働」である。だが、日本側の受け入れ機関も、「研修生」も、それなりの思いを持って活動している。ここから、「農」を基本にした、国境を超える新たな「共生」という関係性を構築していく可能性は、無いのだろうか。

本報告では、国際関係ではなく、「歓待」論をベースにした脱国家的な新しい人際（にんさい）関係の構築をめざして、アジア、そして世界との協働を視野に入れた展望を論じてみたいと思う。

11:35-12:15

都市と自然、それをつなぐ里山（二次的自然環境）

田中伸彦（森林総合研究所）

日本の自然の多くは、数千年にわたる人々との関わり合いから生み出された二次的自然である。先人たちは低地に新田をつくり、台地に用水を引き、原野に木を植え、大規模な破壊を行うことなく、元来の自然を改変し、暮らしやすい環境を整えてきた。

これらは現在「里山」と呼ばれ、日本文化の拠り所として広く関心を集めている。その関心は2007年に安倍元首相が「SATOYAMAイニシアティブ」という政策を提唱するまでに及んでいる。しかし、この伝統を感じさせる「里山」という言葉は、実は昔から使われていたわけではない。例えば、広辞苑への掲載は1998年の第5版からに過ぎない。

本報告では、日本の文化の現在、そして将来を考える一助として、古くて新しい「里山」を遡上にあげ、森林学と観光学の立場から考察してみたい。特に「都市とは？」と「自然とは？」という2つのキーワードから里山と文化について考えてみたい。

12:15-13:00 討論

第2セッション

司会：葉柳和則（長崎大学環境科学部）

14:00-14:40

首都圏郊外の都市における里山 – その実態と未来

寺田徹（日本学術振興会特別研究員・東京大学大学院新領域創成科学研究科）

首都東京の通勤圏として位置づけられる首都圏郊外の都市。一方で開発を逃れた里山（平地林）が未だに多く分布する空間でもある。こうした里山は一般に管理が放棄され、ヤブ化していることが常であり、環境保全上管理を再生することが不可欠である。

首都圏郊外では、市街地近くの里山を市民の手によって管理していく動きがある。こうした動きは、市民、行政、里山所有者との政策的連携によって成立していることが多く、都市における自然との共生のひとつのあり方として興味深い。本発表では千葉県船橋市で活動する「NPO法人こびすくらぶ」の事例を紹介する。

さらには、こうした動きを支援していくため、地球温暖化対策のひとつとして、里山の管理を位置づけようという新たな議論がある。そこで、茨城県つくば市において、管理時に発生する伐採木などの新エネルギーとしての利活用、及び里山そのものへの炭素固定の効果について推定を行った報告者の研究事例を、併せて紹介したい。

14:40-15:20

異文化間の共生をはかる学校空間 – イタリアを事例として

杉野竜美（神戸大学大学院国際協力研究科）

イタリアが移民受入れ国に転じて、約30年が経つ。現在は、就労目的の移民に次いで、家族再結合を目的とした移民の増加により、未成年者の急増が顕著である。そのような状況の中、イタリアはEUに倣い、移民・外国人の社会的統合政策を推進し、異なる文化や価値をもつ彼らとの共生をはかっている。

イタリアの文脈において異文化の共生とは、その場に「共に生きている」という単なる異文化の並存状況だけを意味するのではなく、異文化間の理解と対話を通し、自他両者の変容も想定した共存状況を目指している。社会の縮図でもあり、同時に、社会の成員の育成も担うイタリアの学校教育における異文化間教育の実践を紹介し、改めて学校教育の場で展開される異文化間共生の在り方を再考したい。

15:20-16:00 原爆の記憶と共に生きる – 長崎における生存者とのインタビュー実践から

高山 真（慶應義塾大学大学院社会学研究科・日本学術振興会特別研究員）

報告者は2006年春から、長崎における原爆被災の「語り部」を対象としたライフストーリー・インタビュー調査を実施している。本報告は、現在も継続中のこの調査を手がかりとし、原爆被災をめぐる経験、記憶と共に生きる人々が、その生をとおして、なにを、どのように後世へ継承しようとしているのかについて検討するものである。

具体的には、これまで報告者が行ってきた調査を概観したうえで、報告者がインフォーマントとする3名の語り手のうち、「被爆者」としてより多元的な主体性を有すると思われる一人の生存者の語りに着目することにより、「被爆体験」とよばれる経験の性質について考察することを、報告の中心課題としたい。

16:00-16:50 討論